

一緒に体験、みんなで学ぼう 私たちが発信する自然再生意義

環境ゼミガイド班

島貫裕貴 田代奏太 篠塚將志
加藤楓馬 関沢流世 高橋海斗

1. はじめに

標茶町が約6割を占める釧路湿原は、釧路川に沿って広がる日本最大の湿原である。現在の面積は約2万haで低地湿原の原生的な自然が残されている。近年では、開発に伴い失われた自然を取り戻していくことが課題となっている。2005年の釧路湿原自然再生全体構想では、地域の自然環境への理解を一層深め、環境学習などを通じた意識の改善に取り組むことが必要であると示されている。また、具体的に実施すべき内容として、釧路湿原の価値や現状、自然再生の必要性や実施状況等について、市民向けに分かりやすく発信することが示されている。

そこで私たちは多くの人に湿原の重要性を体感してもらい、理解を深めるべく、2016年から255haと日本一広い敷地面積を有する標茶高校の湿原ガイドフィールド(図1)で定期的なガイド活動を行っている。活動目的は地域への自然再生の意義の普及と設定した。活動目標は、SDGs(持続可能な開発目標)から4つ。4「質の高い教育をみんなに」、11「住み続けられるまちづくりを」、15「陸の豊かさを守ろう」、17「パートナーシップで目標を達成しよう」を設定した。



図1 ガイドフィールド

2. 活動方法

(1) 環境整備

ミニ湿原の中のガイドルートに、雨水が溜まり悪路となっていた。このままではガイドがスムーズに行うことができないと判断し、環境整備を行った。場所は、ミニ湿原内の橋を渡り終えた先の道である。底なし沼のようになっており通れる状況ではなかったため、標茶高校内の廃材を利用し、橋のようにして道を作った。

また、同じ環境ゼミである森林班の協力を仰ぎ、歩きにくくなっていた道にウッドチップを撒いた。

(2) ガイド活動

2018年から町内広報で「標茶高校自然満喫ツアー」と題し参加者を募ることで、地域への定期的なガイドを行った。また、2019年からは標茶町役場やJR北海道などの地域の企業と連携するなど、自らが企画し校内外での活動も行っている。

校内のガイドフィールドは、脱窒湿地から軍馬川流域を主とし、脱窒湿地の入り口前で注意事項や湿原の役割を説明。その後、源流までの動植物をガイドし、源流で記念撮影を行った。また、文書庫をガイドルートに加え標茶町や標茶高校の歴史についてのガイドを行った。このことで、標茶について自然だけでなく歴史を少しでも知ることによって地域愛を育むとともに、興味を沸かせることを狙いとした。ガイド終了後は、アンケート調査を実施すると同時に食品ゼミ牛乳班とアレルギー班が作成したお菓子を配布した。また、ガイドを円滑に行うためにガイドルートの自然環境や、標茶高校の歴史を簡潔にわかりやすくまとめたガイドパンフレット(図2)を作成し、配布した。2019年からJR北海道や標茶町役場と連携し、くしろ湿原ノロッコ号の乗客に対して航路の歴史や自然環境をガイドした。さらに、ドローンを用いてガイド風景を撮影した。

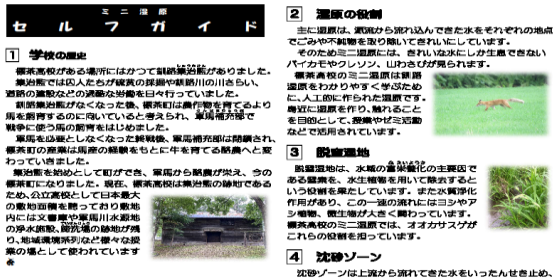


図2 ガイド内容をまとめたパンフレット

3. 活動結果

(1) 環境整備

雨天時ガイドルートが水たまりでとてもガイドをする状況ではないので環境整備を行った。場所はミニ湿原内の木の橋が架かっているところである。ぬかるみがひどく底なし沼のようになっているところを、森林ゼミと協力をしてウッドチップをまいた(図3)。

また、雨天時だけでなくガイドルートには長くのびきった雑草が生えていた。なので、用務員さんに協力を仰ぎ長くのびきった雑草を刈ってもらった。そのことで、スムーズにガイドを行うことができたとともにミニ湿原の景観がよくなった。



図3 ウッドチップをまいた時の様子

(2) ガイド活動

今年はコロナ禍ということもあり、大きな規模

でのガイド活動を行うことができなかった。しかし、コロナの蔓延対策をしっかりと行ったうえで少人数を対象としたガイド活動を行うことができた。

- ・桜が丘中学校受け入れ体験入学
- ・標茶高校受け入れ体験入学
- ・くしろ湿原ノロッコ号
- ・秋の標茶高校自然満喫ツアー

○くしろ湿原ノロッコ号

くしろ湿原ノロッコ号では、乗客約180人に対してガイドを行うことができた(図4)。ガイド方法としては、車内のマイクを用いてプロのガイドの方と同じようにガイドを行った。ガイドの内容は、ノロッコ号が通る地域の歴史や釧路湿原をはじめとした道東の自然環境を自分たちの声で分かりやすく伝えるというものである。

また、ガイドを行う一方でガイドゼミが制作した「鹿レザーストラップ」の販売も行った。乗客約180人に対して60個以上もの鹿レザーを販売することができた。この販売で得たお金は、鹿レザーストラップに必要な素材を買うための資金にあてた。



図4 くしろ湿原ノロッコ号乗車ガイド

○秋の標茶高校自然満喫ツアー

秋の標茶高校自然満喫ツアーでは、今年からの新企画として、標茶高校の一年生を対象としたものである。この企画の目的は、新しく標茶高校に入学してきた一年生にガイドゼミのことについて深く知ってもらうとともに身近な自然

環境に興味関心を持ってもらうことを目的としている。さらに、本校の中でも精力的に活動している酪農食品系列食品ゼミの2班と協力した。その中で、協力して頂いたゼミは自分たちのゼミのPRすることができる時間を設けた。その時間では自分たちが今研究製作している新商品(図5)の宣伝をした。

この時間を作ることによって、環境ゼミだけではなく、標茶高校の最大の特徴ともいえるゼミ活動に興味も持ってもらうことができる。

またガイドの時には標茶高校の湿原に特化したパンフレットを配布し、自作の標茶高校の歴史に関するクイズを掲載したフリップを用意し活用した。配布したパンフレットの中には以前の先輩たちが集めた情報や現在のガイド班のメンバーが集めた湿原環境の情報を多く掲載したものとなっている。



図5 食品ゼミの新商品

4. 今年の活動の反省点

今年の1年間私たちは「湿原の魅力と大切さを多くの人たちに知ってもらう」ことを目標に活動をしてきた。しかし、実際に4月から活動を開始すると多くの解決すべき問題点や課題に直面し、その問題点や課題の対抗策を見出すことが遅れたため自分たちが思い描いたガイド班を実現することができなかった。

例を挙げると、「ガイド班の人数の少なさ」「新型コロナウイルス感染症によるイベント等の開催不可」「昨年度のガイド班のメンバーと

の連携不足」「活動の規模縮小」「外部の方との連携不足」など、多くの問題点が存在した。

「ガイド班の人数の少なさ」という問題点は、ガイド班は、自然環境の保全のイベントの実施だけではなく、標茶高校の湿原環境の保全や整備も活動の一部として行っている。湿原の整備活動の中には、多くの人員が必要になってしまうような、枕木の運搬や湿原内の植物管理、水質管理など、ある条件が崩れてしまうだけで湿原環境が破綻してしまうこともあるため、短い期間での湿原の整備や環境の監視が必要になってしまう。そのため、このような人員の欠如による問題点を防ぐためにも早急に対処が必要だと考える。

この問題点以外も、自分たちではどうすることができないものも多く存在した。

しかし解決が現実的ではない問題以外にも、自分たちでも解決をすることができる課題もあった。「活動の規模縮小」については、「今年の活動は自然環境保全を促す効果的なイベントの実行から来年度以降にガイド班を引き継いで活動してくれる人材の発見及び引継ぎに関する資料の充実化」ということについても取り組みを始めた。

5. 来年度以降の展望

このように、今年1年の活動によって多くの課題や問題点を発見することができた。

しかしこの課題を解決することができなければ、ガイド班としての活動は「人員不足」「活動範囲の縮小」「新たな企画の考案の難化」などといった理由により活動自体が停滞してしまうことが考えられる。

そのような事態を防ぐために、来年度から実施すべきこと4点を提示する。

- ① 低学年からのゼミの積極参加
- ② ゼミ同士の協力関係の強化
- ③ ゼミ引継ぎ期間の長期化
- ④ 今年度より多くのコンクールへの応募以上の4点である。

- ① はゼミ参加を低い学年から行うことでゼミの早期の人員確保や一貫性のあるゼミ活動が可能となる。
- ② は今年行ったガイドゼミが企画運営を行う秋の自然満喫ツアーのように他のゼミとの交流やコラボレーションを行うことでゼミの活動の幅を広げることができる。
- ③ はゼミの引き継ぐ期間を今までの1日や2日といった短い期間で行うのではなく新たなガイド班が始動してからもZOOMなどを利用してオンライン上で前年度のガイド班との交流を行うことでゼミの方向性や計画などを効率的に進めることができる。
- ④ は前年度と比べて環境系のコンクールに応募する機会が減少した、そのため、来年度は今以上のコンクールに応募することで自分たちの活動や環境教育について知ってもらうことができる。

6. おわりに

今後は、釧路圏域の地域住民に対する釧路湿原を守る意識をさらに高めるために、釧路湿原自然再生協議会や標茶町役場と連携した地域住民に対する教育の機会を一層増やすとともに、撮影した動画や写真を各施設に展示し、町の魅力や自然の重要性を発信したい。そのためにも、後輩や地域と密に連携し、継続的な活動ができるようにする。SNSやZOOMを活用し役場や企業の方とつながっていきたい。後輩たちには、今後もガイド活動を行い、身近な自然環境の素晴らしさをより多くの方々に広めてほしい。

最後に本研究で多大なご支援、ご協力をいただいた JR 北海道や標茶町役場の皆様、標茶高校の生徒の皆さん、担当顧問の高橋景太先生をはじめ、たくさんの方々へ深く感謝する。